

—赤ちゃん親子と小・中校生とのふれあい交流（授業）の提案—

東京成徳短期大学教授 寺田清美

1. 『あかちゃんとのふれあい授業（事業）』の重要性

現在日本では、少子化・核家族化により子どもが成長する過程で、人の育ちを学ぶ機会が減少しています。そして、育児不安・児童虐待等の子育てをめぐる問題は深刻さを増しており、幼い命が殺められた報告は後を絶ちません。虐待死の44%が0歳児、その主な起因は「子どもが泣きやまない」などの育児困難にあります。子どもが泣きやまないといった状況など子どもの扱いが困難になったときに親がどのように対処するのかを把握し、養育支援を通して、親を「孤立」から守ることが必要です¹⁾。

泣くことは、赤ちゃんが誕生後初めて主体的に表現する行為です。赤ちゃんが泣くことを肯定的に受けとめ、命を大切なものと考えて欲しい。このような思いから、筆者は、小・中・高校生と生後2か月の赤ちゃんが継続的に関わる「あかちゃんとのふれあい授業」の取り組みを延べ24学級で実施してきました。

この経験から、学童期から赤ちゃんや子育てへの関心を高めることによって、「命の大切さ」、「子ども・家庭の理解」を体験し学ぶことの効果は大きいと感じています²⁾。

2. 授業の「継続性」の意義

この『あかちゃんとのふれあい授業』で大切なことは、授業に「継続性」を持たせることです。赤ちゃんの能力や魅力に継続的にふれることにより、生徒たちの体験は、心豊かなものとなってゆきます。そして、生徒たちは自分も同じように可愛がられて育ったことを想起します。また、赤ちゃんの世話をすることで、自分が役に立っていることを認識します。この「想起」と「役立ち感」は「自己肯定感」が育まれることへとつながっていきます。自分が生きていることに価値があると思えることは、人生に喜びを感じる基盤となります。生徒たちは、人への思いやりの心を育て、親となり子育てをする準備を自然に育んでいくことができるのです。これは育児不安や虐待の予防にもつながることが期待できます。

3. 伝えたいことは「命の尊さ」と「交流」

1990年～中野区でその後何度か区内でくりかえし、中野区の様子を参考にしたS区では2008年度から、ふれあい授業「学校に赤ちゃんが来た」が実施されました。開始にあたり、児童館職員が交替で筆者の中野区でのふれあい授業の様子を見学、集合事前研修を行いました。児童センターとA小学校では、児童センターと、校長先生や担任、養護教諭、保健師等との綿密な打ち合わせを重ねてから実施となりました。A小

学校では、様々な人との「交流」をテーマに、自分の可能性を信じ将来の夢に向かって進んでいくたくましい心を育む取り組みがすでに行われていたため、児童センターとの連携協力がスムーズであったようです。さらに、保健センターの保健師による「命の尊さ」や「赤ちゃん発達」の講義・沐浴指導を受け、児童が実際に赤ちゃんに沐浴をさせる体験するなどの学習も企画されていました。

その後の報告会にA小学校に筆者も伺いましたが、何よりも小学生の表情が明るく、多くの疑問を自分の言葉で表現し、「子ども主体」の授業が展開されていました。地域の保護者や主任児童委員など関係者も参加されていて、まさに地域一丸となって「命の尊さ」を伝え合い、充実した「交流」がなされていることを感じました。初年度の赤ちゃんとして参加したお子さんが2013年度小学1年生として入学しましたが、当時1クラス11人程の単学級であったA小学校は地域での評判を呼び2クラスに増えるほどの入学者数に変化が見られています。

他の事例では、離乳食を作成して赤ちゃんに食べさせてみる体験や中学生の職場体験の事前学習として、赤ちゃんとのふれあい交流のレクチャーを子育て支援事業と連動している東大阪市保育園の取り組みがあります。食育とも関連付けながら「命の大切さ」も伝えという興味深い内容です。さらに、毎回アンケート調査を実施し生徒やスタッフの気持ちの変容なども分析し次年度の活動に活かされています。

4 「地域交流」に関する意義

次世代支援ルーム「ハートフルママ」を18年前に筆者は立ち上げ、地域での育児相談、赤ちゃんと出会いふれあう地域活動や学生と一緒にのまち作り活動など、街中でかけての具体的な実践活動にも取り組んできました。これらの地域交流によって、参加者の中に、地域でお互いを支え合う心の芽が生まれたようです。

小・中・高校時代に『あかちゃんとのふれあい授業』を体験した学生は、大学へ進学後も自ら「子育て支援団活動」（ベビーカーを持って階段を上る親を助ける・妊産婦に席を譲るなど）を実施している率が多いことが分かってきました。

また、地域において乳幼児の親子のために、何か行動したいと、2007年11月子育て応援団として、東京都内4箇所の街頭にでかけてベビーカーの親子に「何かお手伝いすることはありますか」と声をかけあう推進運動やバリアフリー調査も実施しました。階段をベビーカーで移動する経験をした男子学生の一人は、「ベビーカーを持ってみて、はじめて親の辛さを知りました。二人で持って降りたりするとやはり楽だし、それを一人でしている親の辛さを知りました。最初は勇気がいるけど慣れたら平気になり、男性も子育て応援活動していく必要性を感じました」と、感想を述べています。

また、調査の中から生まれた提案により、施錠されていた駅の障害者用のトイレが常時解放されるように変わり、おむつ交換台設置のためには何が必要か自主的に駅員

に尋ねるなど、住民要求度の高さが改善には重要であることに気がつき、自治体に対し、まとめて提案をしていくように、子育てサポーターの方々と確認をしていました。

このように、学生が施設の担当者に聴き取り調査を行なうことによって、調査そのものが啓発活動としての働きをなし、施設管理者の関心を子育てバリアフリー化に向けることができるようになった。さらに、男子学生が自らの経験から「身近な子育て応援団マーク」をデザイン作成し、身に着けながら支援する姿も見られました。その時の学生は6年の経過の中で保育園の保育士として地域の子育て支援活動を実施しています。

5. 「顔の見える育児相談総合支援」へ

これらの内容は学生が地域の方々との交流を通じ、継続して調査をし、問題を自分のものとしたことによる活動成果といえます。これは、長い間に培われてきた地域の方々とのつながりが実を結ぶ形となりました。学生、育児中の方々、地域の皆様が一緒になって子育て応援活動と一緒に実施していくことの重要性をここに改めて感じます。

「あかちゃんとのふれあい交流」は、関わるすべての人にさまざまな気づきをもたらしてくれます。この交流を通して生徒はもちろん、母親は「子育てへの自信」を、スタッフは「地域でのつながりの重要性」を感じ、それぞれが交流することの大切さを実感し、自然に異世代間交流が生まれています。

一回実施すればそれで終わりということではなく、回数を重ねることで持続した活動と関係性もでき、「お互いの顔が見えあう支援」はまさに地域福祉の原点といえるのではないのでしょうか。ここにこの活動の意義を改めて感じます。

妊娠した女性がパートナーと共にこの交流に参加することにより、児童生徒は大きなおなかに触れることで命の神秘さを体感することができます。

さらに、これから新米ママパパになる夫婦は、出産直前に先輩ママパパの育児の様子を眼前で観察することができる。育児準備用品の相談から産褥期、父親に育児参加の在り方等ピュアカウンセラーを受けることが可能になります。

これらの微笑ましい様子を見てみると、地域の中で相互支援していく、まさに地域子育て拠点事業の一例としてこの赤ちゃんとのふれあい活動が有効であるといえるのではないのでしょうか。

3年前から、このふれあい交流のリードをする「赤ちゃんとのふれあい交流ファシリテーター養成講座」を実施し 70 名ほどの受講修了者を輩出してきました。この方々は地域の乳児親子の相談相手になり、また新生児赤ちゃん訪問者としても活躍できうる方々である。かつ、地域の小・中学校ともかかわりが深い方々であり、児童生徒の顔が分かり、連携を可能にしています。

児童生徒は、「乳幼児とその母親や父親と一緒に活動し、親のニーズを探る」このような活動が子育て支援の理解を深め、子どもたちが将来親となったときに、地域の良き相談役にな

ることも期待されます。

新米ママパパは、身近に相談できるファシリテーターに出会うことで育児不安から解放され、地域の児童生徒のためのボランティアとして関わるうちに自分自身の育児に自信を持つように変化していきます。

子育て地域連携のために「赤ちゃんとのふれあい交流ファシリテーター養成講座」の提案をさせていただきたく存じます。

誰もが気軽に声を掛け合い顔が見える相互支援が可能な地域を拠点とした事業が少しでも増えていくことを願ってやみません。

参考文献

- * 1) 厚生労働省「児童虐待による死亡事例の検証結果等について」2005年
- 2) 厚生労働省「改定保育所保育指針解説書」2008年フレーベル館。この内容は第6章の中に、コラムとして掲げられ、保育所と地域のさまざまな方々との交流の必要性が示されました。
- 3) 内閣府少子化対策白書(2013年)